

## 巻頭言

この度は、京都精華大学国際マンガ研究センター（以下、IMRC）の年次報告書2024をご覧頂き、誠にありがとうございます。本報告書が、マンガの新たな可能性を見出す一助となれば幸いです。

IMRCは、2024年もこれまでの約20年にわたる活動をさらに深化させるべく、研究活動と国際的な交流の強化に努めてまいりました。マンガという表現形式は、時代や地域を超えて人々を結びつけ、新たな創造を生み出す力を持つことを、本書を手にとられた皆様はご理解を頂いていることと存じます。私たちは、マンガの可能性をさらに広げることを目指して、実践的活動と学術研究との両面から活動に取り組んでまいりました。国内外の研究者やクリエイターによるシンポジウムの開催、展覧会やコンペティションの実施等、多角的なアプローチを試みました。

本年より、さらに強化した取り組みの一つに、マンガやアニメの歴史と技術の継承を目的としたアーカイブ構築があります。京都国際マンガミュージアムとIMRCは、文化庁メディア芸術事業への積極的な関与等を通じ、設立以来一貫して、資料の収集、保存、活用を実践してまいりました。近年では、多くの出版社が参画する「一般社団法人マンガアーカイブ機構（MAC）」が設立される等、当該アーカイブの価値に対する社会的な認識も高まっています。IMRCは当該機構においても、中心的な役割を担っています。さらにアニメに関しても、制作資料の高精細なアーカイブの構築に着手するとともに、全国、そして世界で標準化されたメタデータを検討する研究会も立ち上げました。これらの活動は2025年も引き続き推進してまいります。

加えまして、出版活動を通じて、多様な視点からマンガの魅力を発信することもいたしました。京都国際マンガミュージアムと共同で、『マンガって何？マンガでわかる マンガの疑問』（青幻舎）を上梓いたしました。本書では、マンガの歴史や制作方法、ビジネス等の様々な切り口で、「マンガとは何か」を考えています。

私は、メディアビジネスを専門とする一人の研究者として、2024年という年はマンガの流通形態の変化と重要性を認識した年でした。マンガを読みたいと願う人々に作品を届けるためには、その作品の魅力に加えて、流通システムが適切に機能する必要があることを改めて考えさせられました。

このことを痛感したのは、ある経験がきっかけでした。私は京都精華大学マンガ学部の授業「メディア産業論」において、マンガ雑誌について講義を行う機会がありました。マンガ学部の学生といえども、現在ではマンガ雑誌を定期購読している学生は少なくなっています。そのため、実物を示しながら説明しようと考え、授業当日の朝に最新号の『週刊少年ジャンプ』を購入しようとコンビニへ向かいました。ところが、単行本の『ONE PIECE』（ワンピース）最新刊を除き、雑誌や書籍は一切置かれていませんでした。他のコンビニも訪れましたが、同じ状況で

した。結局、授業に遅れそうになり、その日は購入を断念しました。紙の雑誌や書籍の販売が停滞し始めたのは1996年頃からの傾向であり、電子書籍市場が成長を遂げて久しいですが、マンガの流通経路の転換が遂にここまでに及んだのかと衝撃を受けました。出版取次大手の日本出版販売が、販売の不振と物流コストの高騰を背景に、2025年2月からコンビニへの雑誌や書籍の配送を終了する決定をしたことも頷けました。

マンガ雑誌というものは、これまで長年に亘り、読者が好きな作品以外の新たな作品と出会う場として機能してきました。今後はその役割は、マンガ雑誌のデジタル形式というよりは、SNSをきっかけとした新たな出会いが担っていくのかもしれない。デジタル技術を活用し、時代の変化に対応した新しい流通モデルが次々と誕生することが期待されます。いずれにしても、マンガがこれまでも、そしてこれからも人々に愛され続けることは変わらないでしょう。もう一つ、マンガの流通に関して忘れられない出来事があります。それは、米国の国際ブランドのクレジットカードによる国内コンテンツ事業者への決済サービスの中止です。例えば、絶版マンガを配信するサイト「マンガ図書館Z」は2024年11月にサービスを停止せざるを得なくなり、大手動画配信サイトでも利用できるクレジットカードが限定され、不便な状態が続いています。

この出来事を読み解くカギは二つあるでしょう。一つは、成人向け作品に対する米国の判断基準と日本の基準の違いがあります。主に日本向けに制作された作品であり、かつ日本の読者向けの販売であるにも関わらず、最終的な決済の段階で米国の基準を適用することとなり混乱が生じています。もう一つのカギは、日本のキャッシュレス決済の未成熟さです。マンガという文化を背景とした商品だからこそ、このグローバルな問題が先鋭化しました。しかし、決済インフラはマンガ販売に限らずビジネス全般や日常生活においても不可欠です。インド等に見られるように、自国の決済インフラの整備が求められるのかもしれない。

このようにマンガを通じて気づかされたのは、マンガがグローバルな文化であるだけでなく、私たちの生活そのものが、グローバルな仕組みの中で成り立っているということでした。文化的商品であるマンガに対して、私たちはその内容の魅力を高めるだけでなく、それをスムーズに享受できる体制を安定して維持していくことも配慮していかなければなりません。

最後になりましたが、本センターの活動は、多くの皆様のご支援とご協力によって成り立っており、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。今後も、マンガを通じた文化交流と学術的な探究を推進し、より豊かな文化を享受できる未来を築くために尽力してまいります。引き続き、ご支援を頂ければ幸いです。